

# 子どもの障がいの有無に関わらず共に楽しむ車いす活動体験の効果 —地域協働推進に繋げる夏休み親子教室の意義— Effectiveness for Children, Disabled or Not, to Experience Wheelchair Sports —Significance of Summertime Parent-Child Workshop for Promoting Community Cooperation

小 野 隆<sup>\*</sup>  
ONO Takashi

## 要 旨：

地域協働推進センター事業「夏休み親子教室」の一講座「車いすスポーツを体験しよう！」の実施結果を報告するとともに、地域の親と子どもの活動支援のあり方について考察を行った。対象を幼児・小学生とその保護者及びサポート学生とし、スポーツ用車いすによる活動体験が、それに参加した親子や学生の感想にどのように反映されるかを把握できるアンケート調査を実施した。その結果、車いすの楽しさを感覚的に理解することができ、車いす使用者への思いやりの心を育むことができたことが推察された。

## Abstract

This paper reports about wheelchair sports experienced by preschoolers, schoolchildren, their parents and assisting university students at a summertime parent-child workshop “Let’s Try Wheelchair Sports!” The situation of community assistance to parent-child activities was reviewed based on the answers to a questionnaire delivered to the participated parents and university students. As a result, it is inferred that the participated preschoolers and schoolchildren sensuously understood the fun of wheelchair sports, and developed compassion towards wheelchair users.

キーワード：幼児、児童、保護者、障がい、車いすスポーツ・レクリエーション

Keyword：Preschoolers, schoolchildren, parents, disability, wheelchair sports/recreation

## I. はじめに

岡崎女子大学・岡崎女子短期大学の「地域協働推進センター」は、「人材育成」と「地域貢献」を両大学の社会的使命とする認識に基づき、「両大学の知的・人的・物的資源を地域とつなぎ、地域の課題解決に応えるための教育・研究・地域活動を全学的に推進する」ことを目的としている<sup>1)</sup>。平成27年度は、開設3年目であり、地域との協働施設として、前身の生涯学習研究センターや福

祉研究所、学術教育総合研究所等に引き続き、実践してきた事業や活動について、その内容や方法が発展してきている。それらの中に、「夏休み親子教室」がある。

そこで、今後の地域協働のあり方を検討するため、地域協働推進センターにおける「夏休み親子教室」事業の意義について、本学において実施した一講座：「車いすスポーツを体験しよう！」の活動に参加した親子等に対するアンケート調査及びサポート学生に対する調査を行った。

---

<sup>\*</sup>岡崎女子大学子ども教育学部

大学内には「親と子どもの発達センター」にて子育て支援活動が様々な形で行われているが、その対象となる子どもは主に未就園児であり、「夏休み親子教室」については地域の親子としている関係から幼児や小学生が主な対象となり、地域協働推進センターの主催する各種公開講座の一事業とされている。地域協働推進センターの発行する「地域とともに 2015 秋号」に掲載された「夏休み親子教室」の記事によると、今年度は「キッズ・チアダンス」(担当: 山田悠莉)、「小麦粉粘土を作って遊ぼう!」(担当: 横田典子)、「くまぼうの目」で絵本をつくろう!」(担当: 鈴木穂波)、「車いすスポーツを体験しよう!」(担当: 小野隆)、「フワフワな羊毛であそぼう!」(担当: 米窪洋介)の5講座に75組の親子が参加し盛況であったとのことである。そして、どの講座も、体を動かしたり自分の手で作ったりすることで、五感や想像力を働かせる体験を重視し、親子で楽しみながら成長する機会を提供しているとの記述がある。また、学生にとっても、参加する親子をサポートすることで親子との関わり方を学び、保育の実践力を身につける良い機会となっているとの記述もある。

本報告では、これら5講座の中の一つに過ぎないが、「車いすスポーツを体験しよう!」の①講座内容の体験から親子が成長する機会となっているか、②親子のサポート体験から学生が成長する機会となっているかの二点について検証したいと考える。

障がいの有無に関わらず、共に楽しむスポーツ・レクリエーション活動を体験することで、どのような効果が期待されるかといった研究はまだ少ない<sup>26)</sup>。今回の講座は、親子にどのような感情や思考が生起されるのかといった知見が得られる可能性を持つ特殊な環境条件を設定しているので、本報告では、アンケート調査等の結果を元に、車いす活動体験の効果に対する考察を加え、さらに今後の「地域協働推進センター」事業のあり方についても、考察の範囲を拡大することとした。

## Ⅱ. 対象・方法

### 1. 調査対象

大学内にて実施する地域協働推進センターの各種公開講座のうち、大学独自で運営している夏休

み親子教室の一講座(参加費 500 円):「車いすスポーツを体験しよう!」に参加した親子6組(幼児1名・小学生7名とその保護者6名、うち下肢障害のある小学生1名及び発達障害のある小学生1名)及びサポート学生3名(岡崎女子大学子ども教育学部子ども教育学科2年生)を対象とした。

### 2. 調査方法

調査対象の講座の実施日時は、平成27年8月3日(月)12:30~14:00であった。講座終了時に、参加した親子にアンケートを実施し、回収した。また、学生には前後30分の準備と片付けも合わせ、実施中の親子のサポートを行ったことに対し、当日中にLINEにより感想を収集した。

### 3. 講座概要

実施した事業の本講座の内容を以下に示す。

#### 1) 講座の目的

なぜ車いす活動を体験するのか?一般用車いすとスポーツ用車いすの違いやその活動体験から知る「①生き生きとしたからだ」と「②他に開かれる身体」を育てること

①一人ひとりの子どものからだを通しての充実感を考えること

②からだとからだの触れ合いが育む環境や他者との関わりに意識を向けること

#### 2) 講座のプログラム

スポーツ用車いす10台を使用した以下の様な体験活動を実施した。

- ちから比べ~押し相撲
- はやさ比べ~大・中・小ボール運びリレー競走
- うまさ比べ~ボールパス練習
- なかま作り~「車いすレク・ラグビー」
- グループのまとめ~意見交換

車いすレク・ラグビーとは、パラリンピック公式競技の車いすラグビーを元にレクリエーション的にアレンジしたもので、本学スポーツ用車いす計10台とバウンスボール1個を使用し5名対5名で行われるゲームである。車いすに乗っている選手が、ボールをホールドしたままで、ポスト間のゴールラインの上を車いすの2輪が通過することにより、1ポイントの得点となる。今回は、3チームのリーグ戦とし1試合5分の計3試合が行

われた。

※注意事項として事前に以下の連絡を参加者に通知した。

- ・必ず運動できる服装でご参加ください。
- ・飲み物、着替え、タオル、体育館シューズ等をご持参ください。

### 3) 実施場所

本学5号館1階の小体育室にて行った。  
室温は約26℃であった。



写真1 車いすレク・ラグビーの様子

## Ⅲ. 結果

### 1. アンケート調査

参加した親子6組のアンケート調査の内容を以下に示す。アンケートの回収数は6部で、回収率は100%であった。

#### 1) 講座の内容

回答数6のうち、1. とても満足は5であったが、その理由として、「初めは怖くて泣いてしまったが、練習しているうちに怖くなくなった。」「初めて乗ったが上手くできて楽しかった。」「ゲームで他の方と交流がもてて良かった。」「車いすは特別なもののようになっていたけれど、身近に感じるようになってきた。」との4つのコメントが得られた。2. 満足は0。3. ふつうは1組で、その理由は記載なし。4. 不満は0。5. とても不満は0。6. 回答なしは0。計6であった。

#### 2) 時期

回答数6のうち、1. とても満足は5であったが、その理由として、「自由研究の題材にできそう。」「夏休みが始まって、少し何かやりたいと思う時期。」との2つのコメントが得られた。2. 満足は1。その理由は記載なし。3. ふつうは0。4. 不満は0。5. とても不満は0。6. 回答なしは0。計6であった。

### 3) 回数

回答数6のうち、1. とても満足は2で、その理由として、「またやってみたいと思う。」との1つのコメントが得られた。2. 満足は1で、その理由として、「何回かあっても楽しいと思う。」とのコメントが得られた。3. ふつうは1で、その理由は記載なし。4. 不満は1で、その理由として、「もう1,2回参加したい。」とのコメントが得られた。5. とても不満は0。6. 回答なしは1。計6であった。

### 4) 料金

回答数6のうち、1. とても満足は1で、その理由は記載なし。2. 満足は2で、その理由として、「ちょうどよい。」とのコメントが得られた。3. ふつうは3で、その理由として「高すぎず受講しやすい。」とのコメントが得られた。4. 不満は0。5. とても不満は0。6. 回答なしは0。計6であった。

### 5) 施設・設備

回答数6のうち、1. とても満足は5で、その理由として、「広すぎず丁度良かった。」「車いすが十分にあり待ち時間なく出来た。」との2つのコメントが得られた。2. 満足は1で、その理由は記載なし。3. ふつうは0。4. 不満は0。5. とても不満は0。6. 回答なしは0。計6であった。

### 6) 講座について(自由記述)

以下の5つのコメントが得られた。

「思わぬ方向に行ったり回ったりするので、とてもエキサイティング。乗りこなしてみたい。スピードが出るのでおもしろい。でも今は健康体でやって、楽しかったけど、もし急に体が動かなくなると「はい、これ乗って」って言われたら悲しくなるのかな？楽しさを知っておけば落ち込まないかな？」

「ボールを使った運動をやりたい。」

「高学年になっても参加できる講座があると嬉しい。」

「初めての参加でしたがとても楽しく学べました。もっとたくさん子ども達に車いすの事を知ってもらいたいと思います。孫との参加でしたが良かったです。」

「車いすでサッカー等他のスポーツもしてみたい。車いすは体力に関係なく楽しめるので、大人も子供も同じスポーツができるのが良いと思いま

した。うちの子は足が遅いので学校のスポーツでは活躍できませんが、ここでは活躍できて良かったようです。」

## 2. サポート学生の感想

### <学生 A>

「大人も子供も最初は他人同士だったのにゲームなどを通して最終的にはみんな友達になっていて驚きました。私は個人的に歩行器を使っていた女の子が気になっていたのですが、ラグビーの時に誰もパスをしてあげてなかったことがとても気になりました。あまり自己主張をするタイプではなさそうだったし、こちらも構えてしまってなかなか声かけができなかったのが反省点かな……。お母さんが楽しそうにする姿を娘さんに見せているような感じがして素敵なお方だなと思いました。最後帰られる時に「すこし人前で話すことが苦手なので緊張してしまっただけです。今日はありがとうございました。」って申し訳なさそうに言っていたのが少しさみしい気持ちになりました。そういう子でも楽しく活動できるようにするためにはどうすればいいのでしょうか？昨日からずっとこれが引っかかっています……。」

### <学生 B>

「最初はみんなぎこちなくて泣いちゃった子もいて、大丈夫かな？楽しめるかな？と心配になったけど最後はなかなか車イスから降りないくらいすごく楽しそうに遊んでいて嬉しかったです。短時間で車イスがとても上手になっていて驚きました。

わたしも歩行器を使っていた女の子が気になりました。こちらから声をかけてあげられる場面はたくさんあったはずなのにそれができなかったことが反省点です。そしたらもう少し楽しんでもらえたかなと思い後悔しています。

反省会のときに男の子が怪我をしていたことを知って、今回は大したことはなさそうなのでよかったのですが、そうゆうのに気づけるようにならなければいけないと思いました。」

### <学生 C>

「あまり体験できないようなボランティアだったので、とても楽しかったです！

私は初め親子関係なしにチームを作ってみんな

ちゃんと楽しめるのか不安でした。ですが、仲良くなるのがかなり早く、最終的にはどこが親子でどこが兄弟なのかわからなくなっていました。遊びを通すことにより、知らない人とも馴染みやすくなるというのを実感しました。でも、Aちゃんのように引っ込み思案でなかなか馴染めない子もいるので、私から嫌がらない程度に積極的に声をかけられたらよかったと思い、そこが反省点です。

私は車イス相撲の時に兄妹で戦おうとしていたペアがいて、どうやってペアを変えようか悩みました。先生はペアを変えようと声かけするだけでなく、学年を聞いて、入れ替わるペアを作って指示をしていたので参考になりました！Bちゃんのように怖い思いをしてしまう子もいるので、対戦相手やチームを決めるときは配慮が必要だと思いました。また、一度やりたくない、嫌だと思ってしまうとトラウマなどにつながり、車イスが嫌いになってしまうかもしれないという思いもあり、どうしてもゲームを楽しんで欲しくてあのような援助をしました。途中からは自分でできる！と言ってあまり援助をしなくても自分で動いていたし、ゲームが終わってからのフリータイムも車イスにずっと乗って楽しそうに遊んでいたのととても嬉しかったです。」

## IV. 考察

参加した親子のアンケート調査結果と、サポートした学生の振り返りコメントの結果から、本講座の特徴や効果を考察し以下に示す。参加者6組14名の内、アンケートに記入したのは全ての保護者で計6名であったが、子どもの感想も聞きつつ記入している姿が見られたので、子どものコメントも多く含まれていることが推察された。

### 1. 講座の内容について

選択肢の5択中最も高評価の「とても満足」と回答した親子は6組中5組であり、残りの1組は「ふつう」と回答し中程度の評価であったので、概ね高い評価が得られたと考える。「ふつう」と評価した親子については他の質問項目への回答から推察される理由があると思われたので次項に述べる。

「とても満足」と回答した5組中4組から、そ

の理由としてのコメントが得られたが、それぞれのコメントを元に振り返りながら親子にもたらした影響について考える。

#### 1) 障がいのある子どもと保護者について

「ゲームで他の方と交流がもてて良かった。」とのコメントに関しては、参加した子どもの内で身体に障がいのある唯一の児童が下肢に障がいがあり、普段は歩行器を使用している子どもであったが、その母親の自由記述「車いすでサッカー等他のスポーツもしてみたい。車いすは体力に関係なく楽しめるので、大人も子供も同じスポーツができるところが良いと思いました。うちの子は足が遅いので学校のスポーツでは活躍できませんが、ここでは活躍できて良かったようです。」にあるように、スポーツ・レクリエーション活動における体力・運動能力の差に関し、大人と子どもや障がいの有無に関係する条件の縮まる環境が設定されるので、障がいのある子どもにとって、貴重な体験となったことと思われた。このことは、障がいのない子どもたちにとっても、同様の効果が得られたと考えられる。ただし、学生A・B・Cの3名とも感想にコメントしているように、Aちゃんは、母親のコメントのようにリレーでは活躍できていたが、ゲームになると、その消極的な性格やチーム戦の様な競技に不慣れなこともあり、あまり活躍できていなかった。Aちゃん本人もそのことは自覚しており、最後の場面で、母親がAちゃんを自立させる訓練のつもりで、アンケートを出しに行くように言い、Aちゃんが歩行器で出しに行く様子を見た際に、悔しそうな表情を浮かべていることに気づいた。Aちゃんは下肢障害のために車いすを使用した経験はあるが、やはり歩行器での移動が中心で車いすを普段あまり使わないので、それ程上手く操作できなかった悔しさがあったように思われた。歩行器での移動はゆっくりしかできないが、段差のある場所でも移動できるし立位での生活での利便性も高いため、通常の生活では使用することが望ましいであろうが、バリアフリーの環境が整備されていれば、今後は車いすでの活動も積極的に取り入れていくことで、より楽しいスポーツ・レクリエーション活動が行えるのではないかと期待される。

リレーやレク・ラグビーのチーム分けについて、

チーム間の力の差が少なくなるようにしつつ、今回は親子が別々のチームになるように配慮した。小学生の親離れ子離れを意図するものであったが、幼児のBちゃんは母親と同じチームとした。障がいのある子どもはいつも母親と一緒になので、今回は別々のチームでゲームができたことは良かったと考える。

#### 2) 参加する子どもの年齢差について

「初めは怖くて泣いてしまったが、練習しているうちに怖くなくなった。」に関しては、参加した子どもの内で唯一の幼児であるBちゃんが、講座のプログラムa.ちから比べで、フロアに引かれた白線の上で車いす同士を向い合せ車いす前部のバンパー部分を密着させた状態から「はっけよいのこった!」の合図で互いに押し合う際、小学生の子どもと対戦して押し負けてしまい、悔しさと共に車いすのリムを握る手の辛さから怖さを感じ泣いてしまった場面があったことと、その後「やりたくない」と言って母親に抱きついていたが、他の児童の楽しそうな様子を見て、次のプログラムb.はやさ比べで、チーム対抗車いすリレーをすることを知り、やる気を取り戻し速く走る練習に参加するようになったというエピソードが挙げられる。この幼児のことは、学生Cが「Bちゃんのように怖い思いをしてしまう子もいるので、対戦相手やチームを決めるときは配慮が必要だと思いました。」と振り返るように、他の児童との年齢の違いや体格の違いから個別に配慮が必要なのは明らかであったので、年齢の近い同性の子ども同士で力比べをしたが、それでも力の差が少し大きかったと言える。今回参加した子どもたちは相手を見て加減をするということはなく素直に全力で頑張る姿が見えたとし、相手との差が大きいからといって諦めることはしなかったので、勝っても負けても、嬉しくても悔しくても、良い体験ができたといえるのではないだろうか。

Bちゃんの母親が学生CにBちゃんを預けて、楽しそうに車いすの操作に夢中になりリレーの練習中も歓声を上げていたことも、学生と共にその様子を見ていたBちゃんの怖さを克服し再度チャレンジするきっかけとなったと思われた。また、学生Cのコメントのように、学生Cは、Bちゃんの心的外傷などにつながり車いす嫌いになることを危惧する気持ちから、リレー競走の後のプ

プログラム c. うまさ比べのボールパス練習や、それに続くプログラム d. なかま作りの車いすレク・ラグビーの中で、B ちゃんにゲームを楽しんで欲しくて、“あのような援助” = 付きっきりで声掛けや車いすの介助等をした結果、B ちゃんが途中からは「自分でできる!」と言って、あまり援助をしなくても自分で動くようになり、ゲームが終わってからのフリータイムでも車いすにずっと乗って楽しそうに遊ぶ様子を見ることができ、とても嬉しく感じる事ができたという大変貴重な経験ができた様子であった。このような体験に対する結果は、保育者を目指す学生にとって大きな学びの機会となったことを示唆している。

### 3) 車いす活動体験について

参加者の「初めて乗ったが上手くできて楽しかった。」「ゲームで他の人と交流がもてて良かった。」「車いすは特別なもののように思っていたけれど、身近に感じる事が出来るようになった。」とのコメントや自由記述欄のコメント等から、参加者にとっては初めての体験により、これまでになく多くのことを感じ学び考える事ができたと思われる。軽い発達障害のある子どもも、兄妹で参加した子どもも、まだ若い祖父の保護者も、車いす操作や遊びの体験を通じ、楽しい時間を過ごすことで最後には参加した皆全てが仲間となっていた様子が感じられた。

講座の時期に対する満足の理由としてのコメントであったが、「自由研究の題材にできそう。」という感想があり、小学校の夏休みに行う講座としての内容に適しているとの支持を得ることもできた。

今後は、例えば発達性協調性運動障害 (DCD) のある小学生に対する支援や子どものロコモティブ・シンドローム (運動器症候群) 予防といった様な幼児から児童の体育に関する最新の知見を伝達していく必要性のあることが考えられる。

### 2. 講座の時期・回数・料金・施設・設備について

参加者アンケートの結果から、時期については、「とても満足」5 組、「満足」1 組であり、その理由として「夏休みが始まって、少し何かやりたいと思う時期。」とのコメントも得られ、問題のないことが判明した。

回数については、「とても満足」2 組、「満足」1 組、

「ふつう」1 組、「不満」1 組、「とても不満」0 組、「回答なし」1 組と、これだけを見ると意見が分かれており、あまり良くない結果のように感じるかもしれないが、その理由として挙げられた計 3 つコメントが、それぞれ「またやってみたいと思う。」「何回かあっても楽しいと思う。」「もう 1,2 回参加したい。」との記述であったので、「また参加したい」という感想ではなく「もっと参加したい」「回数を増やしてほしい」という非常に前向きな意見として捉えることができると考えられた。

料金については、「とても満足」1 組、「満足」2 組、「ふつう」3 組、「不満」0 組、「とても不満」0 組、「回答なし」0 組であったが、その理由からも適正であったことが伺えた。

施設・設備については、「とても満足」5 組、「満足」1 組で、その理由として、「広すぎず丁度良かった。」「車いすが十分にあり待ち時間なく出来た。」との 2 つのコメントが得られ、高く評価されたと考える。エアコンにより室温調節が可能な小体育室ということで、快適に身体活動の体験ができたものと思われた。学生 B のコメントに、小学生が手に軽い怪我をしたことが挙げられたが、学生は 1 年次に「保育内容演習 (健康)」等の授業で、活動時の安全管理を学習しており、スポーツ等をする時の怪我は付き物であることを理解している。今回は車いす操作の注意事項を伝達し、事前に想定し応急手当をできる様に、保健室の準備体制を整えてあったが、行く程の怪我では無かった様である。学生には、小さな怪我については、見守りながら気づいたら声掛けするが、基本的には本人から言ってもらえば良いので、そうなるための信頼関係を構築していくことが大切であることを伝えた。

「地域協働推進センター」には、教員と職員のセンター員がおり、事業等の企画・運営に協働して深く関わっている。そして、各種公開講座では学内の常勤、非常勤の教員が講師を務めており、今回の様な「夏休み親子教室」では教員がサポート学生の指導をしながら企画・進行役を務めている。サポート学生の募集については、講座担当教員に一任することも可能であるが、センター担当職員でボランティア学生を募ることができている。以下は、本学の「親と子どもの発達センター」の講座等の事業と同様となるが、今回の講座のように学内で子どもとその保護者に関わることで

きる恵まれた環境を設定できるという点で、学生にとっても貴重な学びや経験ができるので、今後は様々な分野の教員の関与を期待したい。よって、大学の知的財産や研究成果を地域に還元する機会として、多くの教員に講座の担当を提案すること必要であろう。同時にまた、学生に対しても募集の方法を工夫し、貴重な学びができるボランティアの機会として、今後ともより積極的な参加を期待したい。学生は夏期休業中も課題レポートや講座、アルバイト等で多忙であるが、センターの各事業に対する周知やボランティア受け入れについて、人材育成の面においてもさらに促進していく必要があると考える。

## V. まとめ

本報告は、過去に本学において地域福祉講座や教員免許状更新講習として実施したことのある車いす活動体験を大学地域協働推進センターの夏休み親子教室として行った講座の報告である。これまでの講座とは募集する参加者の構成や運営主体が異なっていたため、本講座の効果や課題も特色を踏まえて検討することができた。また、今後の地域の親子に向けた活動のあり方についても、筆者の個人的な子どもの体育の視点からではあるが、発達性協調性運動障害（DCD）のある小学生に対する支援や子どものロコモ（運動器症候群）予防の必要性という様な多くの示唆を得ることができた。

本報告では、大学が地域に貢献する意味の一つを知的資源・教育財をもとに、文化伝達・啓蒙に繋げる専門性の発揮できるセンターとして機能していることと捉えた上で、対象を幼児・児童とその保護者及びサポート学生とし、スポーツ用車いすによる活動体験が、それに参加した親子や学生の感想にどのように反映されるかを把握できるアンケート調査を実施した。その結果、車いすの楽しさを感覚的に理解することができ、車いす使用者への思いやりの心を育むことに繋がったことが推察された。

今後ともセンターが、本学の「人材育成」と「地域貢献」を社会的使命とする精神の元、「両大学の知的・人的・物的資源を地域とつなぎ、地域の課題解決に応えるための教育・研究・地域活動を全学的に推進する」ことのできる地域の拠点とな

るように、一教員として可能な限りその役割を果たしていきたい。

## 引用文献

- 1) 小宮富子, 創刊にあたって, 地域協働研究, 1, 2015
- 2) 金田安正・小林昭三編著, 「機能訓練と楽しいスポーツ」シリーズ⑤車いすで行う楽しいスポーツ, 全国身体障害者総合福祉センター, 1994
- 3) 野村一路, 21世紀を見据えた障害者スポーツの在り方, (財)日本身体障害者スポーツ協会, 1998
- 4) (財)日本障害者スポーツ協会編, 障害者のスポーツ 指導の手引, (株)ぎょうせい, 2000
- 5) (公財)日本レクリエーション協会, スポーツ・レクリエーションの新たな可能性—障がいのある人もない人も、共に生きる社会へのアプローチ—平成24年度事業報告書, (公財)日本レクリエーション協会, 2013
- 6) (公財)日本レクリエーション協会, 障がいのある人とない人のスポーツ・レクリエーション交流事業 企画ガイド, (公財)日本レクリエーション協会, 2013

## 謝辞

今回の報告に際し、ご協力頂いた本学地域協働推進センター員の皆様に、心より感謝致します。